

せきばん 石盤考

松尾 実

はじめに

石川県下で発掘された資料として石盤を報告されている例は増加しているが、その実態と地域史的な評価を行うにあたり、考古学的に十分に活かされているとはいえない状況である。日本の場合、石盤は近代（明治～大正）での尋常小学校低学年の教具^{（注1）}としてアメリカから輸入されたのがその端緒とされ、その後に学校設立が各地で爆発的に増加するに伴い、国産化されて国内に広く普及した。しかし、新たに鉛筆などの国産化によって消滅した短命の代物といえる。視点をかえて文具史から見ると毛筆、硯、和紙等から鉛筆、ノート（洋紙）、消しゴムに移り変わる際の過渡的な時期に存在する。さらに、以下で検討する教育史、産業史等にも関連しており、特に明治～大正にわたる近代国家形成過程での社会状況を窺う考古資料の一つとして認められる。このように、該期における地域史的な社会様相を考古学的にもアプローチでき、多くの示唆が得られることが可能であると考えられる。

本稿では、まず石盤についての報告を行い、石川県下での集成と若干の検討からその存在意義について評価を行いたい。

1. 石盤とは

石盤とは、粘板岩などの堆積岩を本体部として長方形に薄く加工し、その4辺を組み合わせた木製枠にはめ込んだ教具である。実際には石盤、石筆（蠟石を加工したもの）、石盤ふき（布）を1セットとして習字、算術などの学習の際に使用されていた。なお、呼称については、近年「石板」で報告

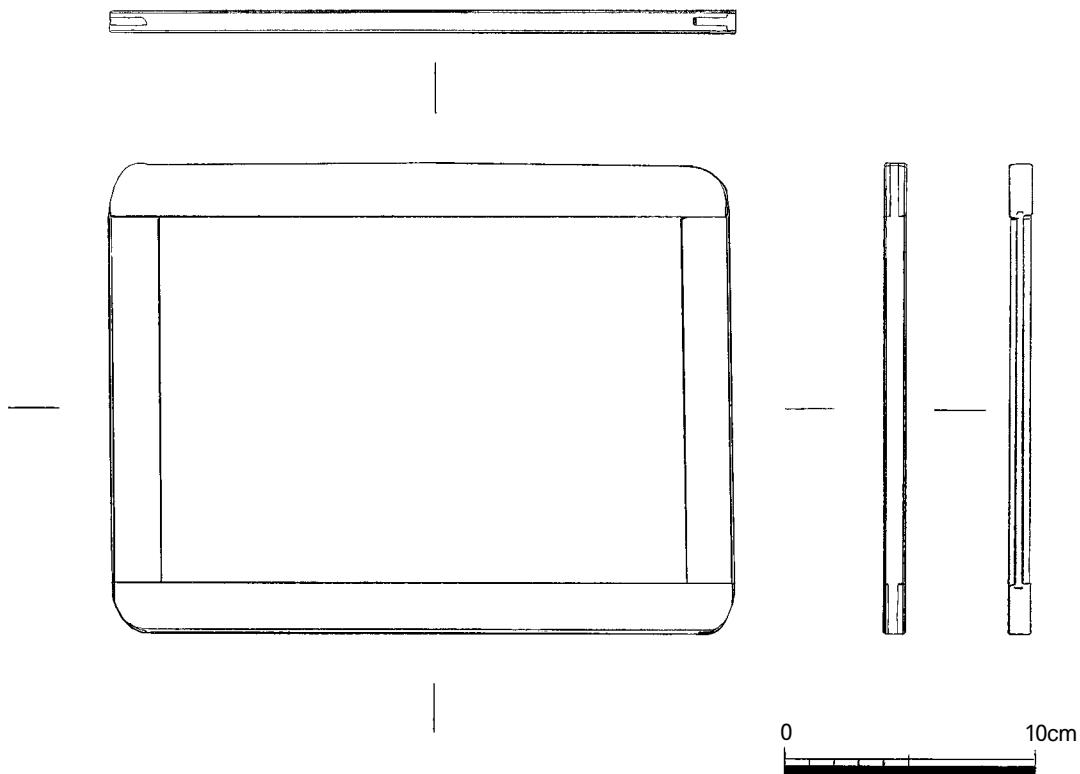


図1 石盤実測図

されている例が多いが、本稿では「石盤」の語を用いる^(注2)。なぜならば、火力で熱して使用する石製調理具や印刷版等の混同を避けるためと、明治期の学校教材名や物品名で常用されていたからである。

以下では、石盤の説明を行う。発掘調査で出土した資料は、破片がほとんどである。全体像が不明であるため、石川県立歴史博物館に所蔵されている完形の石盤資料^(注3)を例にとって検討を行う。

石盤の本体部である石材は黒色の粘板岩 (slate)^(注4)と考えられ、本体の4辺には木枠がついている。表面には柾目が見える。材は杉と考える。木枠をはめ込んだ石盤の大きさは、縦18.7cm、横24.8cmの長方形となる。江戸時代からの度量衡(1寸=約3.1cm)で換算すると、縦6寸、横8寸となる^(注5)。国産化された石盤と考える。また、規格品であると考え、大量生産を行っていたと推測する。商品としては、本体部に木枠を取り付けたものを石盤として広く販売・流通していたと考える^(注6)。本資料の本体側縁部の観察はできなかったが、類例^(注7)から、本体部の規格は、縦15cm(約5寸)、横22.3cm(約7寸)での長方形となる。表裏の4辺には約0.5cmの幅で砥がれて厚さが薄くなる。つまり、本体部の厚さがほぼ0.3cmに対し、側縁部は0.2cmとなる。木枠を取り付けやすいためだと考える。さらに、側面には斜位の線条痕が見られる。これは切り出し、又は裁断時における痕跡と考えられるが、そのまま砥いで平坦にしないているのは、木枠を取り付けやすくする工人の合理的な石工技術といえよう^(注8)。

木枠の4隅は丸く加工し、組み合わせる細工を施しており、使用時の配慮を窺わせる工夫といえよう。なお、木枠は容易に取り外しさせないようにするため、4隅の組み合わせ部を接着剤等で補強したと考えられる。ちなみに、この形態を石盤A類とする。石盤B類は、4隅の組み合わせた部分に径約0.2cmの穿孔を行い、竹などを差込み、木枠の部品が分解しない工夫を凝らしている形態とする^(注9)。

石盤の製作工程としては、鉱山からの切り出し、屋内工場における裁断・本体部の規格の加工、細加工(砥ぎ調整)で、別工場において木枠を取り付けと検品、商品として何体かをセットにして梱包し、出荷したと想定するが、具体的にどの商店が関与していたかなどは不明である^(注10)。ちなみに、後に廉価な紙製石盤が出回るが、最初に東京麻生の古川堂が商標登録を取得し、販売しているが、石盤も商標登録がされていたのかは証左がないため、不明である。

最後に、本資料は実際に使用されていたようであり、横方向の擦痕が多数見られる。しかも、擦痕の多くは左端が深く、右端にいくに従って浅くなる。両面のうち片方の使用頻度が大きく違い、表、裏として認識がされていたことも窺える。色調も異なり、頻度の高い方はやや白い。蠟石などによるものか。石盤には文字、数字などを書き込むための石筆、それらを消す布が必要とされる。よって、



写真1 石盤 (A類)



写真2 石盤 (B類)

石盤本体に多くある擦痕はこれらに関係した痕跡であると推定する。使用痕跡としては、他に格子状に線刻したのが見られるのが少なくない。石盤は両面が使用可能であり、両面に使用痕跡が認められるものがあり、片面のみの使用は行っていない。

2. 石川県下における石盤出土遺跡の集成と若干の考察

管見ではあるが、本章では石川県下で出土した遺跡の集成作業を行った。近代頃の遺物を報告している例は多くなく、また限られているので、石盤とセットとされる石筆も加えて報告する。

遺跡から石盤が出土する傾向としては、包含層が多いが、土坑から土器とともに出土している例もある。遺構から出土している町中の遺跡では、圃場整備などの土地改変が農村ほど進んでいないため、良好に残存していたと考える。

石盤については破片が多く、黒色粘板岩がほとんどである。現在のところ、石材は粘板岩に限定されている記述^(注11)と符合する。しかし、その生産地が宮城県桃生郡雄勝浜産と断定するには、慎重な姿勢をとる必要がある。ただし、私見ではその可能性は高いと考える^(注12)。

また、清金アガトウ遺跡、九谷A遺跡では、側縁部に沿って0.5cmほど、砥ぎ調整をし、その側縁端面には斜位の線条痕が認められる資料が見られる。広坂遺跡出土資料で観察した痕跡と酷似しており、汎的に認められる。石材の切り出し時の痕跡ならば、生産地が同じである可能性が高く、また工場内における裁断時の痕跡ならば、同一製作場での可能性が高いことを示唆する。製作工程今後、側縁端面の線条痕の記録も発掘資料として報告する必要があることを提言したい。

醒ヶ井遺跡では格子状の線刻が認められ、使用していたことが窺える。この格子状の線刻は、習字、計算などに際してつけられたものと考えるが、その使用方法の具体的な内容は不明である。

石盤が出土した付近には、明治期に設立された学校が付近にある傾向を示すことを指摘する。ただし、江戸時代から町を形成していた人口密度が高い地域よりも、比較的低い農村において妥当性が認められるかもしれない。つまり、町では富裕層の密度が高いため、個人の所有量が農村よりも多かったと考える。出土地についても、町では学校から離れたところにあるため、個人が保有していた可能性が高く、一方の農村では学校所在地付近から出土していることから首肯されよう。

一方の石筆は、石材が蠟石であると認められる。色調などは多様で、白色系、茶色系、灰色系などがあるが、白色系が多い。遺物の完形資料はないが、直径は0.5～6cmの範疇に収まる。断面形状は、円形が多く(A類)、六角形などの面取りを行っているもの(B類)、かまぼこ型(C類)などがある。石筆の消費量は2日に1本ほどであったとされ、その消費量は多かったと考えられる。これらは販売元、製作場の違いと考える。

先端を現在の鉛筆のように尖らせて使用しており、片側や両側を削っており、現在の鉛筆と同じような使用方法であったことがその現象から推定できる。

製作工程としては、鉾山からの切り出し、屋内工場での裁断・規格の加工を行い、検品して、何本かをセットにして梱包して出荷したと想定する。

3. 石盤について

石盤は、元治元年(1864年)に横浜へ輸入されたのが最初とされる。その使い道は学校教育に利用されてきた。明治政府は集団教育、開発主義によるアメリカの授業形態を採用し、その教材器具を輸入した。その後、明治3・4年からは輸入量は増え、明治9年にはさらに増大したようである。明治5年に文部省は「小学教則」で石盤について触れており、実際の教育現場で「綴字」^{カナツカヒ}を学習する際に石盤を用いることを示している。石川県金沢区では、明治6年に貧民子弟のための教育機関として「共立小学社」が設置され、そのもとに夜学の「仁恵学校」が設立された。その趣旨と規則^(注13)のな

かには石盤の記述があることから少なくとも金沢区の学校に石盤が普及していた可能性を示唆する。同年には宮城県桃生郡雄勝浜で石盤鉱石が発見され、東京府の築地で石盤製造販売会社が国産化を開始した。一方、静岡県安部郡中野村でも国産石盤が発売されたようである。つまり、この頃から国産化された石盤が流通されたといえる。石盤の普及に従い、様々な問題点^(注14)が浮かび上がり、明治20年後半には衛生面などから石盤廃止の提案がなされ、明治32年には大阪府師範学校付属小学校が石盤の使用を廃止し、練習帳と鉛筆を用いることを規定した。明治34年には、真崎鉛筆（現三菱鉛筆）が本格的な国産鉛筆として製造販売を行い、また国産洋紙の普及に伴い、明治40年頃には石盤は衰退していった。ただし、この事象については地方において必ずしも当てはまるというものでないことを付言しておく。石盤が主に普及していたのは明治10年～40年頃と推定できる。

では、どの年齢が使用していたのか。尋常小学校や女学校などがあげられるが、主に初等普通教育期間の満6歳～10歳の中でも最初の2年間ほどであったようである。また、教材を使用した授業はどのようなものがあったのか。多くは「習字」、「書取」、「算術」などである。なかでも「習字」、「書取」ではあらかじめ石盤に文字枠の縦横線を引かせる記述があり、本報告における石盤集成のなかにも格子状に線刻しているものはその際の痕跡の可能性がある。「算術」については、数字を覚える際と筆算を実行させる際に使用したようである。他にも「地理」、「物課」（物の名称について学習する学科）などにも利用されていた。このように、文字や数字を幾度と書き込む役割を担っていたことがわかる。

価格については、国産化されたといえ高価であったようで、明治31年頃でさえ1枚8銭であったとされる。代用品も多く発明され、明治7年頃に発売された紙製石盤は石盤を補う形で普及している。（価格が3枚折り2銭、6枚折り4銭）他に、木箱などに砂をいれたもの（砂盆）、木製石盤（木盤）、瓦盤などがあったようである。先述で検討した石盤出土の傾向を考えると、尋常小学校などにあることは、石盤は各個人すべてが保有していたとは考えがたい。経済的に恵まれている生徒は個人が所有していたであろうが、そうでない生徒は代用品を所有していたか学校側が購入し、貸与もしくは給与という形で使用していた場合もある。

それでは、見方を変えて、石盤を産業製品としてみると、どのような知見が得られるのか。本体部は粘板岩である。これらは石盤を国産化する際に調査した結果、良質な石材が採取できる報告を受けての国産化に踏み切ったとされる。同質の石材を利用した産業製品としては天然スレート瓦があり、近代建築の屋根材に使用された。この製品も規格にそった石材の切り出し、屋内工場における裁断・加工、搬送などといった一連の製作工程は計画的な生産ラインに沿って製作されており、石盤との共通点が多く、関係性を示唆する。主な生産地としては、宮城県や岐阜県などが挙げられる。これらは、国が主導に行った殖産興業政策の一環の事象として捉えられるかと思う。

石材の採掘に際しては宮城県桃生郡雄勝浜付近に東京集治監とともに日本で最初に設立された宮城集治監があり、そこには政治犯が多く収容され、労働力となって使役していたとされる。

また、本体部の生産場と木製枠の製作場は、まず、木材の木取り、加工を行う製作工程を経ると考えるが、本体部の製作場と隣接したところでその工場があったとは考えにくく、設計図をもとに他で製作されていたものとする。また、本体部と木製枠を組み合わせる工場があり、そこで、商品として組み合わせて商品を管理する組織が販売して各地域に流通したと想定する。

折しも、当時の鉄道建設ラッシュや汽船運行の活発化によって、地方から東京、その逆の運送・運輸などの流通の発達によって、人・商品の流動化が激しくなった事象と学制頒布による学校設立の急増とに石盤が地方にまで進出したことは、無関係でないと考える。

4. まとめ

このように石盤を対象に検討すると、発掘調査で出土した石盤の付近には、明治期の尋常小学校があった可能性があることを指摘する。また、学校教材として主に明治10年～40年頃まで利用されたと考えられ、学校の設立・存続時期との関連でより具体的に時期などが判明できる可能性がある^(注15)。

そして、石盤、石筆は、文具史、教育史、産業史といった多分野の一端に係わることが認められた。ひいては、明治期の文明開化、西洋化、殖産興業などといった往時の社会の変化と関係することを指摘する。

発掘調査などで出土した場合、土地利用の変遷を提示することが多いが、たとえ近代といっても、その地域での学校という存在は近隣の住民にとって無視できないといえよう。

おわりに

石盤は明治期の社会を反映した産物の一つで歴史的意義があり、地域史的な評価を与える時にも重要であることを提言したいと考えた。また、将来このような時期の資料でも共有財産として認識して未来に残したいと考えたのである。

以上のような思惑とはうらはらに、資料の不徹底と不十分な検討のために、突き詰めて言及できなかった点も多くあり、理解しづらいところが多々あったと思われるが、ご了承いただきたい。

最後になりましたが、本稿を起すにあたり以下の機関、各位にご教示、ご協力頂いた。氏名を記して感謝の意としたい。

石川県立歴史博物館 (財)金沢市埋蔵文化財センター 岐阜県垂井町タルイピアセンター
伊藤さやか 織田亜希子 垣内光次郎 楠 正勝 西田昌弘 本康宏史 長田貴誉子

[補注]

注1 添田晴雄 1992 「筆記用具の変遷と学習」石附 実編 『近代日本の学校文化誌』 思文閣出版
新村 出編 2004 「広辞苑」 第5版 岩波書店

注2 石盤の「盤」は、たらい・台・皿・鉢・碁盤・将棋盤などの意味合いで用いられる。輸入されてきた物に対して、当初、台や皿などを連想したから「盤」をもちいた可能性がある。垣内光次郎氏のご教示をいただいた。大正時代に発行された辞書を紐解くと、「石盤」は薄い板と説明するものが多いが、その語源の記述に関して明確な文献は発見では見当たらなかった。今後の課題としたい。

注3 本資料の実見に際して、石川県立歴史博物館学芸員の本康宏史氏に便宜を図っていただいた上に多くのご教示、ご協力いただいた。なお、写真掲載は許可をいただいている。

注4 本資料における石材の認定は、地質学、岩石学などの科学的な測定基準に則って判断するのが適切であるが、管見ながら著者の経験的な判断で石材の認定を黒色粘板岩とする。

注5 日本では明治19年にメートル条約に加盟したが、国内での商品規格は従来の度量衡を採用していたようである。ちなみに、大正14年にメートル法を採用した教科書「尋常小学算術」の使用が開始されているが、この頃には、鉛筆、ノート、消しゴムなどによって変わられて、石盤の姿はほとんど見るものがなくなったと予想される。新村 出編 2004 「広辞苑」 第5版 岩波書店 石附 実編 1992 『近代日本の学校文化誌』 思文閣出版

注6 本センター垣内光次郎氏より「石盤は木枠がついて製品といえる。」との示唆をいただいた。

注7 金沢市埋蔵文化財センターの楠正勝氏には、資料の実見に際して便宜を図っていただいた。また、未報告の金沢市広坂遺跡出土資料の実見をさせていただいた。なお、本稿の記載については、許可をいただいた。

注8 本センター垣内光次郎氏のご教示をいただいた。

注9 岐阜県垂井町タルイピアセンターの長田貴誉子氏には、資料の実見に際して便宜を図っていただいた。これらの類型化では、それが販売元・製作地の違い、時期差なのかという問題は今回の検討では解答できないため、今後の課題としたい。

注10 同注7

注11 石井研堂 1926 『明治事物起原』 春陽堂 石井研堂 1944 増補改訂『明治事物起原』下巻 春陽堂

注12 東京都霞ヶ関所在の法務省館内で建築物の屋根材に使用されていた天然スレート瓦が展示しており、実見した。石盤の本体部の粘板岩と同質であると考え。

注13 「貧生給与品ノ内硯石盤草紙八、入学ノ時一度二限り、再度給与セズ」 金沢市史編さん委員会 2003 『金沢市史』資料編15 金沢市

注14 高価などの経済面、石筆の白い粉による眼病、字などを消す時に唾で消すなどの衛生面、記録性の乏しさなどの教育面があげられる。

注15 長野県松本市所在の重要文化財旧開智学校では、昭和5～6年頃まで使われていたとされる。地方では、そのように長い間使用されていたと考えられ、石川県下でもその可能性はある。今後の検討課題としたい。

[引用・参考文献]

石井研堂 1926 『明治事物起原』 春陽堂

石井研堂 1944 増補改訂『明治事物起原』下巻 春陽堂

富奥郷土史編纂会 1975 『富奥郷土史』 富奥農業協同組合・富奥公民館

安丸良夫 1995 朝日新聞社 『監獄の誕生』 「朝日百科 日本の歴史別冊 歴史を読みなおす」22

重要文化財旧開智学校管理事務所 1990 『重要文化財旧開智学校 展示解説図録』

海野福寿 1992 『日清・日露戦争』 「日本の歴史」 集英社

石附 実編 1992 『近代日本の学校文化誌』 思文閣出版

季刊考古学 第72号 2000 『近・現代の考古学』 雄山閣出版

タリイピアセンター 1995 『ふるさとの学校展』第5回企画展 タリイピアセンター・歴史民俗資料館

タリイピアセンター 1996 『タリイピアセンター歴史民俗資料館報』No. 2

五十嵐彰・阪本宏児 1996 『近現代考古学の現状と課題 - 「新しい時代」の考古学をめぐって - 』 考古学研究第43巻第2号

湯本豪一 1996 『図説 明治事物起源事典』 柏書房

小林和美 2002 『大阪陸軍幼年学校について』「大阪城発掘調査報告Ⅰ」自然科学・考察編 (財)大阪府文化財センター

小林謙一・渡辺貴子 2002 『物質文化としての近現代考古学の課題 - 大橋遺跡出土の近現代ガラス容器の検討から - 』「東京考古」20 東京考古談話会

市村新太郎 2003 『池島・福万寺遺跡出土近現代ガラス容器』 「大阪文化財研究」第24号 (財)大阪府文化財センター

金沢市史編さん委員会 2003 『金沢市史』資料編15 金沢市

松山和彦 2003 『九谷A遺跡』「石川県埋蔵文化財情報」第10号 (財)石川県埋蔵文化財センター

[図・写真出典]

図1：新規作成【実測：筆者、トレース：筆者】

写真1：新規作成 【筆者撮影 石川県立歴史博物館所蔵 掲載許可を得る。】

写真2：新規作成 【筆者撮影 岐阜県不破郡垂井町 タリイピアセンター・歴史民俗資料館所蔵 掲載許可を得る。】

表1：新規作成

石盤出土遺跡

遺跡名	所在地 (現在名と旧名)	出土遺構	出土 遺物	石材	点数	遺跡周辺学校施設	備考	参考文献
本町一丁目遺跡	金沢市本町一丁目	整地層	石盤	黒色粘板岩	1 (破片)	横安江町尋常小学校	なし	金沢市編 1995 「金沢市本町一丁目遺跡」 金沢市埋蔵文化財センター
安江町遺跡	金沢市安江町	SK04 (土坑)	石盤	不明 (未確認)	1 (破片)	横安江町尋常小学校	共伴遺物に近世末～近代初頭の瀬戸物、摺鉢等あり。	金沢市編 1997 「金沢市安江町遺跡」 金沢市埋蔵文化財センター
醒ヶ井遺跡	金沢市醒ヶ井町	包含層	石盤	黒色粘板岩	1 (破片)	横安江町尋常小学校	線刻あり。(使用痕)	金沢市編 2001 「金沢市醒ヶ井遺跡」 金沢市埋蔵文化財センター
九谷 A 遺跡 (3・7・8・10次)	江沼郡山中町九谷町 (旧西谷町)	表土 包含層 SD 5 不明遺構	石盤	黒色粘板岩	8 (破片)	九谷尋常小学校簡易科	測縁部端面に斜位の線状痕あり。(成形痕)	石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2006 「九谷 A 遺跡Ⅱ」(仮) 本年度報告書刊行予定
清金アガトウ遺跡	石川郡野々市町清金 (旧清金村・富奥村)	包含層	石盤	黒色粘板岩	1 (破片)	清金尋常小学校簡易科	なし	石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2006 「清金アガトウ遺跡 第2・3次」(仮) 本年度報告書刊行予定
広坂遺跡	金沢市広坂町	包含層	石盤	黒色粘板岩	1 (ほぼ完形)	石川県師範学校付属小学校	なし	* 未報告

石筆出土遺跡

遺跡名	所在地 (現在名と旧名)	出土遺構	出土 遺物	石材	点数	遺跡周辺学校施設	備考	参考文献
昭和町遺跡	金沢市昭和町 (旧折違町)	SD01	石筆	白・赤茶・黄土・焦げ茶色蠟石	6	横安江町尋常小学校	点数は未報告資料も含む。	金沢市編 2004 「昭和町遺跡Ⅲ」 金沢市埋蔵文化財センター
安江町遺跡	金沢市安江町	未確認	石筆	白色蠟石	2	横安江町尋常小学校	なし	金沢市編 1997 「金沢市安江町遺跡」 金沢市埋蔵文化財センター * 報告書掲載外資料
広坂遺跡	金沢市広坂町	土坑 包含層 など	石筆	白・赤茶・黄土・焦げ茶・紫色蠟石	200以上	石川県師範学校付属小学校	なし	* 未報告